

(第一稿)

「記憶と印象」接点II インド・レポート

一九八〇・三 ミッションナリイズ・オブ・チャリティ訪問記

SATORU TAKAHASHI

〔欄外〕 交響曲

全体で何の曲になるのか

〈西洋音楽あさり〉

God is love and He loves you. Love others
as He loves you. …… (マザーテレサ)

うつくしい言葉だ。人の言葉とも思えない。人間にこのような生活ができるものか。しかも、loveの意味がわからない。

〔欄外〕 すばらしいことを神様のために、

キリスト教は無理なことばかりという印象がある。伝えんとする根本義、大切なものがそれだとするならば、日常の生活者に活力を与えるたとえと諭しの方がはるかに意義があろう。で、それはあるのか。

イエスの物語は美しくかなしい。わたくしも一度胸が震えた記憶がある。十数年前、荒み切っていた頃、目にしたマタイ伝の行間に赤い線を塗り、それと同じだけの混濁した粒をこぼした記憶がある。おそらくそれは感傷だった。それから何年か後、額に聖水をかけられてアウグスティヌスという名をもらった時には、聖書は退屈な本になり始めた。イエスも神も、習慣のないわたくしには破片であった。

〔欄外〕 センチメント？

〔行間〕 わたくし

(この旅のとき、物臭なわたくしがはじめて腰を

あげた。その頃、ただ図書館と研究室とアルコールとの日に追われる生活の中で、時折りアルコールにつかつた胸の底から、おれは滅んで灰となるというつぶやきをいつもきいていた。

(この旅は、これでもよかつたし、これでもよかつた。そう思つて出かけた。しかし、これでもよかつたことに後になつて気づくことになつた。)

旅の間、常に不足感と焦燥感に追われていた。キリスト教は人をいかすものなのか。どのようにその命にはたらきかけて、どのようにいかしてくれるか。

〔欄外〕 (聖書の言葉) ↓ ○早朝ミサの様子 ○(マザーたちの方針と活動の根源)

シスター達の瞳がうつくしい。つねに気にかかる。そのシスターにも笑顔があふれている。マザーテレサの本部、ハンセン氏病院、孤児の家、身心障害の施設、ライ病患者のホーム。シスター達、そこで働く者達は生き生きしている。行く先々で出会う、「神さまのために」働くことを自覚するその彼女らインド人シスター達の微

笑が、終始気になつた。わたくしは、その偽りのない微笑が自分に向けられることをなにがしか恐怖に思つた。

コノヒトモ。コノヒトモオナジデスネ。ワタシタチノタスケガホシイノデスネ。

わたくし達の執着し、こだわり続けるわずかばかりの生が、彼女達の全身の笑顔の前には脆くも崩れ去る。

〔欄外〕 写真△

わたくしは祈つたことがなかつた。もしくは祈り続けたことがなかつた。わたくしの祈りは心に痛みが走るその刹那にだけ思い出された。

「死を待つ人の家」という施設の名は奇妙な名称である。西洋のキリスト教感覚による呼称だろう。

中は醜悪だった。清潔そうにしてあるが、通路の奥

の部屋から強烈なアンモニアの臭いが漂ってくる。死を待つべき人達が路上からここに運ばれて介抱を受ける。ここへ来れば薬をくれ、食事ができ、何よりも親切な世話をしてくれる。

わたくし達はシスター、ブラザーの指示で食事や爪切りの世話を手伝った。十代から老年まで、このホームに集まってくる人々は、介抱と社会復帰と再度の介抱とを繰り返している。つまり、彼らは出て行っても、また戻ってくるのだ。

これらのインド人特有の素顔のわかりにくい、忠実で隠忍の表情には、生きている目の輝きがない。介抱が満足いかなないと、不平をいうものもある。それを相手にするとわたくしなら空しくなるが、シスター達は徒労と考えない。

なぜ、同じ国民なのにシスターの目はあのようにも美しく生きているのか。相手は、一週間もすれば同じ状態で戻ってくる人間達なのだ。

〔欄外〕 マザーの言葉

〔欄外〕 ①

わたくしも男子病棟の手を使えぬものの顔を起こして一口ずつスプーンで与える。わたくしはしかし、こうした介助にいつごろか、以前からさして抵抗がなかった。言葉は通じない。相手の顔の様子、目つきに従う。わたくしの目を見つめたまま口をあげたら、もつとほしいということだ。

〔欄外〕 ②

髭を剃り、手足の爪を切り、髪を刈る。十五、六の少年も、そして老人も、骨と皮ばかりが多い。喜怒哀楽の見えにくい表情で

〔欄外〕 写真B

こちらの視線を捕えて離さない大きな瞳が、わたくしにはかろうじて生きている意思を示す。わたくしは細い枯れ木のような手足をとって、爪を切ろうとする。と

ところが裸足で歩くのが普通の彼らの足の爪は、ドロや塵がつまつて盛りあがり、堅くなっていた。両手の力をこめても長い爪がビクともしない。大袈裟なポーズで切れない素振をすると、少しばかり目尻をゆるめて笑った。

わたくしには、それで十分だった。

〔欄外〕 びく (下文「ハサミ」「ツルツル」の横にもひらがな表記あり。)

〔欄外〕 ③

人間の髪の毛を剃るといふ経験をはじめとする。まだ若い青年の頭である。ハサミなどでなく、安全剃刀でツルツルにしてくれ、と彼はゼスチャーする。石けんをつけて恐る恐る頭をさすりながら剃ってゆく。彼は心地よさそうな面持ちで時折りこちらを見る。

わたくしはそれを素直にありがたく思った。

市中にあふれる路上生活者の群には、華やかなものかわりに生活そのものが噴き出している。誰もかれもがそれぞれの持ち場で各々の事に没頭している。そ

のおとなしげで、親切げで個々のことに熱心な表情から、なりふりとは別次元の生命の欲望が伝わってくる。旅行客に甘え声で手をさし出してくる子供。片言の日本語をまじえ、ガイドをしてやろうと身振り手振りですごきまでもついてくる靴磨きの少年。演出された喜怒哀楽の顔色は生きる欲望のあかしであった。昼夜の別なく寝そべつたまま、生きているのかどうかもわからぬ人をあちこちの路上で見かける。無論、誰も見向きもしない。

④ 生きることが、およそ存在として生きていくだけの人々の多いこの街(カルカッタ)では、生存の根源が素顔をむき出しで歩き回る。

根源は悪でもあり善でもあり、醜悪そのものが尊厳を体現する。

⑤ はじめに命イシチありき。命は貴いものです……。人のかたちをしていれば、なおさら貴いものです……。

③ イエスは全ての素顔を受け入れた。マザー・テレサ達にとつてこれほど生きがい満ちた場所はなかっただろう。どれもこれも、目にするもの全てがloveであった。

〔欄外〕 ↓ノート loveは

④ わたくし一個の苦悩などは吹き飛ばされて石つぶになる。

⑤ 日本堤の山谷の街に住んでもう三年余りになるインド人のブラザーが丁寧に横に並べたような日本語でわたくしに度々語ったことがある。

ワタシタチハカミサマトイツシヨニスンデイマスネ。

トテモコーフクナコトデス。

彼らは三人で共同生活をしながら山谷労働者の中

で活動している。そういう彼ら自身も施しもので暮らしている。男ばかりの世帯だから蒲団フトンはかび臭いままだが、その借間はいつもきれいに掃除されていた。そこへ行くと、わたくしもいつしよに祈らされる。その晩はかび臭い蒲団の中で不思議とよい夢を見た。

〔欄外〕 カビ臭い

サンヤフレンドトオトモダチニナルコトガ、カミサマカライタダイタワタシタチノツトメデス。

〔欄外〕 写真①

誰でも自分自身を保証すればするだけ、自然で永久的な真実の保証である愛を、いつそう多く失うことになるのです。(トルストイ)

(わたくし達生活者はどれがloveでどれがloveでないか、神経を細らせて明確に識別しないでは生きられないと考える。どれもloveと考える者は、生活の枠ワケから

追い立てられる。)

考えてみれば、生涯「独身」で、よいもの——美しいもの以外の世界には住まない彼ら、ブラザー・シスター達は、わたくし達の身の保証以上の保証を手に行っているのかもしれない。

シシュ、バワン(孤児の家)で子供を両腕にかかえただ愛苦しい目をした若いシスターの底ぬけの幸福顔。シヤンティ・ナガール(ライ病患者のリハビリテーションセンター)での、ニューヨークから来たばかりという孤独で充足顔の神父とどの顔も天国に住んでいそうな微笑のシスター達。わたくしにもほんの少しその秘密が感得された。

髭を生やし放題で、日本の銭湯は恥ずかしいからとろくに体も洗わず、だからいつもそばでは臭い日本堤のブラザーが、わたくしに向かつて、ニコニコ顔で同じ文句をうたうようにいった。

タカハシサン、ワータシタチハカミシヤマトイツシヨニクラシテマスネ。アナタモイツシヨニクラシマセンカ。タノシイデスヨ。

わたくしは、天国を見たことがある。そこへどうやって登ろうか。人が信じようとは思わない。わたくしは幼い頃、天国を目にしたことがある。鼻たらしで泣きべそをわたくしが、自殺する数か月前の母に手をひかれて、強い雷雨に打たれながら夕暮れの田圃の畦道を母の里へ急いでいた時、見たのは母の方が先であった。ほらつと、繋いだ手の片側で指差した空の方向へ雲の中に、大きな美しい御殿が光に輝らし出されて「本ま」くつきりが見えた。あつという響きがきえない。

その入口はわたくしにも、二十数年経った今ごろになつていくらかわかりかけた気がする。けれども、入口の狭さに驚き悲しむばかりである。

わたくしの苦悩は風に舞う苦悩。わたくしの中でもあまされた苦悩だった。わたくしの生活はからまり「本マ」、からまわり続けた。

イエスはなにものなりや？

この世のもっとも美しいもの——そのもののために、そのものと一緒に、そのものの中で生きるのならば、おそらくは生活は生きるであろう。

ノート

〔欄外〕（愛とは云々の項）↓（教授へ）

④ わたくしのもっているすべて。わたくしの素顔は、まだ生きていない。

「ほー、ええとこのぼんぼんという感じじゃなあ。」

冬の路上に寝そべっていたおっさんにブラザーが声をかけると、起き上がってわたくしの顔をまじまじと見つめてからボソリといった。彼は百パーセントアル中

であるから、しかも何も所持していないゆえにあけすけと「本マ」しやべる。同じアル中になりかけのわたくしには、その言辞(句)の棘がストレートにささってくる。

〔欄外〕 ボンボン

おやじたちは、アルコールによって、全て子供に——どうしようもないだっ子にかえっていく。したがって、野性「本マ」の素顔がよみがえる。そのかわりに、大切な現実生活の何ものか、枯れてマヒしてしまった。存在の根源である裸形の表情とは、——わたくしの脳裏にしみついたものは、祖父のものいわぬ死相と、薬毒死した母の地獄をうつつし出す苦相とおだやかな死相、そして、わたくしによって寿命を縮めた父の苦相と死「本マ」であった。

わたくし自身も、普段飲むことをやめていなかった。滅びに対する恐怖からの逃避と自分で名づけて分析・呼称して休まず飲み続けた。わたくしはしかし、やめるべきであった。

③ 人の世のおよそ全ての苦渋と快樂と、人間の
行なうあらゆる所業について、その嘗め尽くしてきた
ことや、犯した犯罪までも、ゴルトムントが(せきあえ
ぬ流れのように、語り、ザンゲし尽くした時)淡々と語
り明かした時、側で友人の告解にじつと耳を澄まして
いた司祭のナルチスは、何を聞いても驚かなかつた。す
なわち罪そのものをあまり重く考えなかつた。ただ、最
後に「それであなたは祈りましたか。」と尋ねただけで
あつた。「ただ最後まで幾度となく、祈りを怠つたこと
について仮借なく警告し罰した。」(「知と愛一ナルチス
とゴルトムント」)

〔欄外〕

調

〔以下、本文を×印で抹消の跡〕

人としてばかりでなく、わたくしは祈るよとに
おいてすら無限につまぎいた。

〔欄外〕 一日のうち三時間は祈りに時間をとるシスター達

〔欄外〕 (研究室の教授へ)

十田ばかりだが初めてといえる旅から帰国してす
ぐ、わたくしは病気で五田ばかり寝込んだ。体全体の
だるさと腹痛のようなもので、ベットでようになっていた。

回復後の夏、帰省できぬと郷里に連絡すると、兄の
声でわたくしが長くかわいがつて飼つていた犬が、ちよ
ちどわたくしのベットでのたうちまわつていた時期に突然、ポツ
クリと亡くなつたよとを知つた。わたくしはそれを何か
用も、電話で知るまで気づかずにはいた。その晩わたくし
は声を出さず激しくオエツした。

木はわたくしのかわりに逝つたのだと、わたくしには
思えた。